



史跡 能古焼古窯
(全長22m・幅8m・比高差5.2m)

能古焼古窯跡より発掘した陶片 (文様はすべて染付)



碗蓋 (菊花)・実物大



碗蓋 (籠と草花)・直径10cm・高さ2.5cm



小鉢・直径8.5cm・高さ6cm



飯碗 (草花)・高台直径4.5cm・高さ6cm



小鉢蓋・つまみの長さ4.5cm



縁高中皿 (島と帆船)・直径15cm・高さ3cm

写真・杉山謙 (日大写真学科)

史跡・能古島古窯跡

丸山 雍成

原生林が根づき、篠竹や萱のしげみに、自然の豊かさを感じさせる能古島。その中腹部に位置して、博多湾を見おろし、歴史や伝説に名高い姪浜・生の松原等々を眺望しながら横たわる巨大な古窯跡。これこそ過ぎし日の陶磁器の生産と流通を彷彿とさせる姿である。

右の後書の記述を裏付けけるかのように、『前町村書上帳』には、この島で天明初年の頃に陶器を製したのが、五力年程でやめた、土は神王寺上の山から出、薬



出土した窯道具類

この能古島古窯跡については、江戸時代は寛政頃の『筑前国統風土記附録』に、「明和の頃より此嶋にて陶器を製す」とみえ、また、文化(天保年間)に書かれた『筑前国統風土記拾遺』には、「此寺の上の山に陶器をつくる土あり、天明初年此土をとりて製せしが、い

程なく其事止みたり」とある。このように能古島古窯の陶磁器生産は、有田焼の技術者誘致により発

その逮捕のために下目付を派遣したことを伝えている。

展の緒にいたが、先進技術の秘密漏洩をおそれる佐賀藩の防止策が効を奏して、短年月で挫折したのであった。

この古窯の本体は、焚口部一室と焼成室七室からなる連房式登り窯で、全長が二二メートル、窯尻後方の馬蹄形の溝をふくめると二六・五メートル、比高差は五・二メートルである。焼成室は、第一〜四室が土をこ



能古焼古窯第5室内

ねて築造、第五〜七室は埴積みでつくられ、室面積は後方になるにつれて次第に大きくなり、第一室と第七室との差は、室の縦・横とも約一対一の割合となっている。

出土遺物は、窯道具が最も多量で、陶磁器がこれに次ぐが、後者の大部分が有田焼系(有田周辺の筒井窯手法)の磁器染付で、茶碗・皿・蓋などである。陶器は筑前高取焼系のもので、一〜二割を占める。このほか、焼成室内部から銅銭(寛永通宝)五枚が出土した。

能古焼古窯は、文献資料からも発掘調査の結果からも、その足跡が比較的明らかな陶磁器生産の窯である。江戸時代中期後半、約二十年前後の短期間、日用雑器を基本にしながらも、高取焼系の陶器、有田焼系の磁器を相次いで多量に生産していた点に特徴が認められる。これが福岡市内で唯一残された、しかも保存状態のきわめて良好な古窯であるところから、陶磁器とその製作過程、窯の変遷などを知る上で貴重な文化遺産となっている。平成二年三月、福岡市の指定史跡となった。

真翁銅像ものがたり

・痛恨「父の涙」
・日給十七銭
・玄洋社からウラジオへ

会津若松に友人増永信吉を残し、
独り気落ちしての帰郷となった。
出発前、あまり話もせず家を出た

こともあって、家族みんなが心配し
ていたことがよくわかった。
ぼくが、砂糖屋の住み込み丁稚に
なった時、小学校高等科を出ただけ
では給料などにありつける時代では
ない。わずかに盆、正月三日の休みに
里帰りこづかいとして五十銭貰え
るだけであった。

ただ、奉公を続ける内に同店主人
の山崎甚吉は気持ちの広い人物とわ
かりかけていたが、ぼくに話さず丁
稚時代は月五十銭を、ぼく名儀で貯
金、一年して手代並みになって車力
を引いて卸しをするようになる、
この貯金を月一円にしてくれており、
これは同店をやめた時に貯金通帳を
渡されて知った。

この虎の子は、今回の出郷でほと
んどなくなつたわけである。

数日後、父親が考えこんでいるば
くに元氣を出させるつもりか「おで

んでも食おうよ」と。初めて親子
二人、下川端の屋台に行った。

ぼくの
気もほぐ
れ、父に
素直に自
分の行動
を詫びた。
また、い
ろいろと
心境を話
すうちに、
母親が風
呂敷包み
を持って
質屋に行
くのが情
けないと
話した。

この時、
父の目頭
にキラリ
と光るのが見えた。父の涙である。
思わずハッとしたし、この時ほど自



明治36年京都武徳会出場のとき
左から青柳喜平・真藤（洋服）・河野桃太郎・小河義起

分で自分がイヤになったことはない。
考えもしない不意の言葉は父を責め、
ぼくにも辛く突き刺つたのである。
父に対するこの時の心の負い目は、
以来、相当に長くぼくに残つて消え
なかった。

父は、曾祖父の代から片土居の荒
物屋を、親せきに保証を頼まれて身
代限りと
し、母の
実家であ
る岸田家
の借家に
移つたの
が、紺屋
町のわが
生家であ
る。
父は大柄
の体格
であるが
気はやさ
しく、別
に手職も
ないため
に知り合
いの店の
手伝いな

どしていたが、母と姉三人は夜おそ
くまで頼まれものの縫いものをして

いた。当時、こうした家内仕事は、
内職といわれて甚だ安い手間賃で、
これに親子八人の生活は重かつたよ
うである。

ぼくが大阪の叔父を頼り、また砂
糖屋の丁稚奉公をしたのも、まず自
分の食いぶちを家から減らすことだ
と考へてのことであつた。
ぼくは、思案のあげく、付属小の
柴田文城先生に一部始終を話し相談
した。先生は、どうして早く来なかつ
たかと言われ、数日後お手紙で就職
のご紹介をくださった。これで、ぼ
くの福岡郵便局勤めが始まつた。明
治三十五年（一八八三）七月、初任
給は日給十七銭であつた。

紹介者がよかつたので三カ月後に
正式の職員となり、日給二十銭とな
る。これで、夜間、当直にも就くこ
とになり、宿直費は九銭、後に十銭
になった。夜十時になると宿直室に
入り、備付の夜具を使用し、朝六時
まで就眠できる。馴れると、家庭持
ちの先輩職員から代理宿直を頼まれ、
この代直を加えると月の大半が当直
室生活になった。本も読めるし、月
収も当直料こみで七円ほどになる。
局勤めが始まってから、毎月二円を
家に入れていたが、後に三円にした。
母は、この金を必ず神棚に供えたが、

わが家に定日の給料収入は初めてのことで、家族みんなにも一寸した感動になったようである。

参考までに、郵便局長は判任一等とかで、月給五十円。電信課長が三十五円。なお、局長は局お抱えの人力車で登庁するほか、公用外出もこれを使った。職員先輩に、後に住吉宮の宮司(先代)になった横田留止郎がいた。同家は、先祖代々からの宮司職であるが、なんでも神主になるのが嫌であった、と。しかし後に宮司を継ぐ。青年客気、夢多き時代であり、国に熱気があった。

ぼくが玄洋社に入ったのは、この年十一月。郵便局勤めは、生活も思考にも落着きができ、先も見えるようになったが、年齢も十九才になっていた。

玄洋社では多感の青年が、談論風発、常に天下を談じ国を論じ、また先輩の語る三国干渉後の極東と国際情勢、とくに露西亞の極東における行動には若い血をたぎらせた。

以上のように話すと、玄洋社内風の儀は命知らずの壮士や、豪傑ぶつたパンカラ青年が常に屯していたように思われるが、これは大いに違つ。ましてや飲酒狼藉など絶対ない。女気は、ないでもない。ぼくの時

期に、上品な婦人が通いで掃除や片づけ、花生けなどされていたが、なんでも明治十年の変で戦死(獄死とも聞く)された川越六之丞という三百石取りの未亡人で、気品があり美しい女であった。障子の破れなど綺麗に切り紙、継ぎ紙で繕われる。我々も廊下の雑布がけ、便所掃除と庭掃きぐらひは、誰いうとなく日課のようにして手伝った。

よく、玄洋社を軽輩、足軽ばかりのようにいうが、これも違う。千石取りや、川越婦人のようなご出身もあり、頭山先生にしても生家は百石取りのお馬廻りである。封建時代の身分にこだわらず軽輩、農町民でも自由思想と愛国、ただ政府官権の変則と横暴を排除する気概を第一にする結社であった。女性問題などで世間に批判されることなど全くなし、お互い議論のあげくは、次のような小唄ならぬ都々逸でもなく、勝手な節まわしでオチにした。

男なら弱い女を

泣かせるな ヨイシャッ

いろ恋ざたは しばし絶て

狭い日本にや

住みあいた ヨイシャッ

お国のためなら死んでもよい

ヨイシャッ

その時の話題次第で、どちらかを歌うと、それで幕となるのであるが不思議と愛嬌のおさまりになった。

玄洋社々長の進藤喜平太先生は裏つづきの屋敷に住まれ、平素はあまり顔を見ないが、時折り広間で居合せる者ひとしく行儀を正す中に温容な談笑をされることがあった。しまいには、ぼくは局当直以外は玄洋社に寝泊りして、局に通勤するようになった。定収のあるぼくは、小づかい銭がある方で、夜食の焼芋代、時にはぜんざいの元手を出した。

社中で、毎月の収入があるのは戸田順吉(小学校代用教員)と、ぼくぐらいのもので、給料日などは、中の番(下名島町)の「文六うどん」(二銭五厘)をみんなにおごるのが常例。これに午莠天を入れたりすると、大いに豪勢としたものだ。

この時、ぼくが親しくした同輩に味岡芳太郎がある。彼は玄洋社から修猷館に通学していたが、いたずらが過ぎて退校となる。進藤喜平太社長の肝入りで当時創立早々の東筑中学校に転入でき、のちに盛岡高等農林学校に進む。卒業後、米国に渡航して、ブツツリと音信がなく、ぼくが十数年後、東京に居を構えてから、漂然と表われ、以来、食客五年。この

間、自分の過去を語るでもなく、ぼくも聞かなかつたが、五年後にまた風のように去って行った。以来、連絡なしであるが、不思議と、この人物、時々思い出すね。

社中で、漢学塾玄洋学館(いまの市役所前と旧県庁横の通が北に突き当たったところにあつた)に通つた。先生は福田東風、熊本神風連の生き残り、と聞いていたが、古武士の風格がある立派な人であつた。

もちろん、明道館柔道も大いにやつた。この時の玄洋社生活と明道館での先輩知己は

奈良原到・的野半介・大原義剛・安永東之助・友枝新平・浦上正孝・喜多島淳・小野鴻之助・河野桃太郎・戸田順吉・広田丈太郎(のち弘毅)、小河義起など。

日英同盟すでに成り、対露問題は緊張を高めていたが、時の駐露公使は栗野慎一郎・外務省政務局長に山座田次郎、この両者ともに福岡人である。玄洋社の大先輩頭山満先生、これに内田良平、佐々友房らによる対露同志会が結成され、露西亞軍の満州派兵増強に対する撤兵要求決議によって、政府の弱腰を責める動きなど、玄洋社内も熱湯煮えたつ状況であつた。

能古博物館だより

当時の玄洋社規模は、正確には知らぬが境域七、八百坪。右側に明道館道場その奥に主屋（一部二階建）があり、裏手の空地はほとんど野菜畠。北側奥に進藤喜平太社長の屋敷。その裏は海岸（いまの福岡保健所と舞鶴中学校の道路）で、東は箱崎、香椎の松原から名島、奈多とつづき、西は荒津山（西公園）、前面右手に志賀、玄海島が見える。博多湾を望みながら、ときに、玄海北洋に練声の詩吟、或は波浪高く雄叫を挑むところであったが、これが迷惑にされる土地柄は全くなかった。

こうした玄洋社起居の中で、ぼくは海外雄飛を考えるようになった。そのため給料の中から貯金を考え、まず宿直料十銭は、これに当てた。明治三十六年、国民皆兵制度による徴兵検査を受けたが、結果は意外に「籤外れ」となる。

当時の青年は、徴兵検査が済んで一人前。これで大人の仲間入りができる。これを機会に将来の方針を立てる習慣が国民のみんなにあった。何処においても、どんな仕事をしておろうとも、必ず適齢（満二十才）には本籍地の郷里で徴兵検査を受けなければならなかった。その結果、甲種合格になれば現役兵として入隊

し、兵役に就く。不合格者はあらためて自分の進路を真剣に考え、思い切った立志実行もできるのである。

ぼくには時もよし、東京から内田良平氏が西下、玄洋社で「露領ウラジオストックの日本人居留民会が経営する天真館道場の柔道教師推薦を依頼されている」話が披露された。

これについてには末永節、河野桃太郎の両先輩から、ぼくに勧説があった。幸いに両親の賛成も得て、シベリヤ渡航が実現できた。

ウラジオストックでは、居留民会副会長の菊地軍三郎から到着早々、立派な防寒衣装一式を贈られ、その他大いに好遇されたが、これには内田良平添書に相当以上の紹介記事があったからと思われた。道場も煉瓦



ウラジオに於て 友人近江岸弁之助(左)と(明治39年)

造り洋館建の中に三〇畳敷以上、かなり立派なものであった。

まだ当時のウラジオには領事館設置がされておらず、日本政府出先公館としては貿易事務所があり、この主任駐在官川上俊彦に知己を得たが、その外一般居留者からも大いに親愛され、幸いに、ぼくの天真館教師は大いに繁昌した。日本の祝祭日などにはシベリヤ奥地から続々とウラジオに集まる日本人の数は多く、その進出は驚くほかなかった。

ぼくは着任早々、居留民会付設機関について露西亜語の勉強を始めた。この時、ぼくと同年輩の近江岸弁之助を知り、彼は貿易商杉浦商会の番頭でその露語はまことに流暢、それに柔道も熱心、ぼくの良き伴侶になっ

てくれた。

三十七年二月四日、日露国交断絶。「八日、日本海軍、旅順港外の露艦隊を攻撃、露艦を旅順港閉塞」の情報が川上駐在官から知らされる。

シベリヤの邦人をウラジオに集結このため天真館を提供し、川上駐在官の要請で、ぼくは邦人の故国引揚げ業務を手伝った。数次の引揚げ船を出した後、どうしても便船がなく大いに困った。入港中の独逸商船パタビヤ号の借上げを交渉しているが、船長が現金前払いでないと応じないと言う。川上駐在官は大いに困惑したが公館の備金すでに欠乏しており、苦心の結果、集結残留者の現金借上げによって、ようやく備船料を支払い、この独逸商船を最後の引揚船とした。

ぼくは御真影護衛となって川上駐在官に随行して埠頭に向うため、積雪の市街に馬櫓を走らせる途中、向うから勢いよく進んできた露人が乗った馬櫓とすれちがった。

そのとき、どうしたはずみか相手の櫓が転倒、その乗員は雪中に投げ出された。

瞬間、川上俊彦「日本勝てり」と快哉を発したが、これで前途大いに光明を感じたのである。

読者のコーナー

◎ たくさんのお手紙を頂きましたので、その中から、紙面の許す限りご紹介させて頂きたいと思えます。

ひと口仁和加風 名所案内

能古博物館

〽博多湾の夢の浮島「能古のこたアザうつ」と前イ歴史探訪で案内しとったが、アスター覚えとんなるなあ。

〽覚えとらじゃあ、ここ能古の地名の由来やら白鬚神社・永福寺・能古焼窯跡・蒙古塚・万葉歌碑に鹿垣・北浦城跡・鬼の洗濯岩のことから鮎物標本の島の地層まで何でもかんでも一遍で話して聞かせちゃつとんなろうが、忘れるもんかい。

〽そげなふう言うちやんなりやアあたきも話し甲斐のあるて言うもんバイ。嬉しかやなあ。今日は去年開館になった能古博物館ば案内してんどう。

〽なんな、そげなとのでけとうとな、どこんこいあると、一寸教えちゃつてんない。

〽渡船場から西側イ歩いていったら大きな銀杏の木のあるとが永福寺で、この前案内しとったが、その上が能古焼窯跡。竹藪の中イ埋もれて解り難かったとバ綺麗に発掘して、覆屋根まででけて、七つの窯跡が立派に見られるやなあ。そこイ万葉歌碑のあるたアあんたも知つとろーが。

〽うん知つとろー。知つとろー。

〽親切な受付嬢の指示で森林浴しながら山道イ登って行つたら立派な博物館の建つとろーとい、びっくりするやなあ。

〽そう言やア小・中学校の真下イあるとがそうばいナ、ところでこげな立派な博物館バ誰が建てらつたとな。

〽これも前イ、あたきが歴史散歩パスハイクで連れて行つたことのある秋月の亀陽文庫が主になって建ててございとたい。

〽道理で器用(亀陽)なことさつしやる苦たい。

〽亀陽というたあ、黒田藩の儒学者亀井南冥・昭陽一家のことで、生まれが姪の浜東網屋じゃけん立地条件がちやうど合うた訳たい。

〽姪浜保育所の前イアスタが建てなつた標柱と説明板がそれじゃろー。

〽そうたい、その亀陽文庫の設立者が真藤慎太郎翁(俳優進藤英太郎の養父)と言う博多の立志伝中の人たい。

〽そう言やア聞いたことのある人の名前じゃなあ、くわしゅう知りたかなあ。

〽紙面がなかけん言われんばつてん、今能古博物館に行きやア、真翁銅像ものがたりバ特集して入場者には配りござあけん行つてんない。

〽早速行つてんどう。福岡市の人ア65才以上はシルバー手帳持っていきやア渡船料は無料やし、ほんにイ行きやすうなつとるもんあ。

〽これから能古は花ざかり。今ラッパ水仙ば渡船場で売りこぎるが四月いなりア

桜の満開から、つつじ、菜の花、沙干狩、薬草採集、夏は海水浴やら、いつ行つても心残(能古)りのう楽しんでこられるやなあ。

〽大都會の真ん中い、こげなよか浮島のあるたあ珍しいこつちやなア。

〽博物館に団体で行つたら庄野理事長さんがそらアくわしゅう親切に説明バしちやあらつしやるばい。

〽どげな内容のことばナ。

〽この博物館に展示しちやア、価値の高い陶器、筑前五ヶ浦廻船のこと、能古出身の画家多々羅義雄画伯の作品、更には亀井一家の諸美術品、書画と一杯あるバイ。

〽そげな話バあたきも聞きとうなつた。今度の日曜あたりには是非行かなやあなぬい(南冥)。

福岡市西区 西島 弘

連載「真翁銅像ものがたり」が始まりましたね。読後、一頁(3号)の銅像を、しばし見ました。眺望のきく位置から福博の町を見渡されて、どんな想念を抱いておられるのだろうかと、勝手な想像をしました。真藤翁の如き大人物の方の、波瀾の一生とは、どう展開してゆくのでしょうか。地元の方で身近に感じ、次回が待たれて楽しみです。それから、不審に思ったことをお尋ねしますが、大阪の中ノ島商業学校に入学された

くらいですから、余裕ある家庭環境だったと思われます。それがどうして、住み込み奉公などされたのでしょうか。福岡市南区 片桐 寛子 (ご質問には本文にてお答え致しますので、お楽しみに)

飯盛神社は小学校の時の遠足地であり、その神事の時の郡内の小学校の奉納相撲に参加したことがあり、懐しく思いました。又、展示品の解説も大変参考になりました。

飯塚市 小山 元治

◎福岡市中央区・矢島謙次様からは送料にとのお心使いで、多額の郵便切手を頂きました。

【滋賀県】小堀定泰様【神戸市】安部好子様【福岡市】荒木見悟様・倉富美智子様・永田蘇水様・西正義様・藤野和子様・村上靖朝様【太宰府市】木本康枝様・小林トミ様【久留米市】三島庄一様【甘木市】貝嶋菊乃様【唐津市】山浦数馬様
ほかのみな様よりお手紙頂きました。ありがとうございます。

◎みな様からの投稿をお待ちしております。

●平成二年三月九日～二十九日
当館にて西南学院大学の博物館学
芸員実習が行われました。

ある実習生の二週間

西南学院大学文学部
吉川 千秋

三月九日、私は博物館実習生十二
名のうちの一人として、能古博物館
への坂道を登った。上へ登るにつれ
て、島から見る

市街地の風景は
刻々と表情を変
えて、私はその
見慣れない景色
に新鮮さを感じ
ていた。

オリエンテー
ションの時、私
達は古窯修復作
業班、能古資料
作成班、事務・
用務班に分けら
れた。日程には
多様な内容の講
義が組まれてい
て、期待と不安
が心の中に湧き起こる。「三週間、
いろいろな事を吸収して下さい。」



陶片発掘作業風景

という言葉が心に残った。最初の
一週間は作業班で、陶磁器の発掘を
した。初めての体験。最初は丁寧に
掘り進めていたが、終わりの方にな
るとやや乱暴になっていったと思う。
しかし、掘れば掘るほど出るけれど、
愛着を感じ始め、ジグゾーパズ
ルのような修復に頭を悩ませながら
も、くっついた時の喜びは大きなも
のだった。

二週間目は事務・用務班。本館
へと続く歩道を作
る手伝いをした。
この時初めて「学
芸員は、雑芸員で
ある。」という言
葉を理解する。シャ
ベルを使って道を
ならしなが
ら、学芸員は、研
究者であり、コレ
クターであり、社
会教育者であり、
事務員であり作業
員でもあるのだと
思った。決して、
机の前に座ってい
るだけではなく、
外に出て活動する人でもあるのだ。
学校の中ではわからなかったが、こ

こに来てようやく理解できたように
思う。

三週間目は能古資料作成班。私達
の班にはわずか
な時間しか残さ
れていなかった
ため、前の班が
作った地図を片
手に、白鬚神社、
北浦城跡、檀一
雄旧宅しか回れ
なかった。しか
し、この頃にな
ると、桜も咲き
すみれ、れんげ、
さんぼうげが私
達に春の訪れを
感じさせ、資料
作成の労を忘れ
させるようにな
ららかな日差しだった。結局、地図
は未完成に終わったけれど、能古島
の地理、自然にはちょっと詳しくなっ
たと思う。また、能古島に関する本
を読みあさったので、島の歴史に対
する知識も増えたのでは……。

他にも書ききれない程、色々な事
があったのですが、ただただ博物
館のみなさんに感謝するのみです。
それから、喫茶室のコーヒーはとて
見つめていた。



館園内にて記念撮影

もおいしかったです。ありがとうございます。
ございました。私にとって能古博物館
はもう一度来てみたいと思わせる博
物館です。多
くの事を学ば
せてもらって、
本当にありが
とうございま
した。

三月二十九
日実習最終日、
帰りのフェリー
の上から、きつ
と私達は、そ
れぞれに大切
な何かを吸収
したんだろう
と思いつつ、
小さくなって
いく能古島を
見つめていた。
吉川千秋さん・五嶋千恵さん
上村真己さん・高松良英くん
原 新吾くん・浪江真由子さん
山内桃子さん・今仁博紹くん
末若智子さん・二神久子さん
前畑美和さん・山本良子さん
西南学院大学十二名の皆さんお疲
れさまでした。当館にとっても、よ
い刺激となりました。

能古博物館だより

けいしゅう
関秀

亀井少栞伝 (四)

庄野寿人

少栞書画会出展・父昭陽江戸に上る

文化三年(一八〇〇)、少栞九才。この年、少栞は思いもよらぬ幸運を得て、華やかに世に出る機会に恵まれた。

福岡藩の支藩、秋月五万石の八代藩主黒田長舒は、学問を好み文雅を解する殿様であった。当時、上方の京都・江戸に見られる書画会(いまの書画展)の企画を、前年四月、秋月藩校教授の原古処と、藩主侍読(註)として、福岡から毎月定例の出講を勤める亀井昭陽の両名に意見を求め、さらに兩人にその進行を命じた。

年を越した三月、いよいよ「西都雅集」として、太宰府天満宮を会場に開催された。

出展者は百一名に及び、秋月藩主とその二公子を筆頭に、封国両藩地、および江戸に於て学問文事をたしなむ武士と学者、これに在野文人らによる出展で賑やかな開幕となった。この出展者名と書画題は、目録刷にされ、その一部が当館の収蔵資料にあり(現在展示中)、詳細を知ること

とができる。同目録は「西都雅集展観書画題名」の標題で、冒頭は昭陽の序文で秋月侯の好学による開催の趣旨を述べ、以下本文は出展題とその氏名を掲記、その結語は古処が文運盛行を賦にして讃える。本文は對線仕切りで次の通りの紹介である。

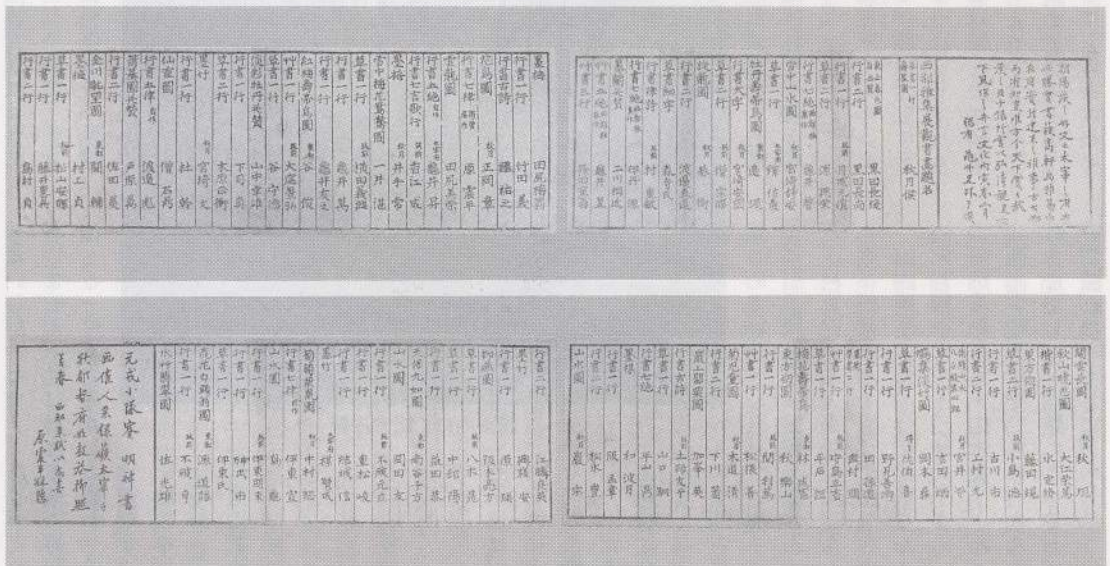
草書一行 寿屋図	秋月侯
東山春色図 自画賛	黒田長瑗
行書二行	黒田長尚
行書一行	筑前月成元愷

(目録原寸はタテ20cm・ヨコ22cm) 右の筆頭は秋月侯、藩主長舒公その人で、書・画の二作品を出展。

つづく二公子、兄長瑗が東山春色図に自賛の一幅、弟長尚は行書体の二行書。次の行書一行は、本藩中老の月成氏とわかる。以下、出展書画題と作者名に、筑前(福岡のこと)・博多・太宰府・秋月・東都(江戸の

こと)と各居所が付書される。これによって福岡本藩と秋月兩藩士また、両藩定府士(藩江戸屋敷勤務士)からの応募に加えて、博多・太宰府各地の学者・在野文人による詩文教養層の厚さが美事に西都雅集を協賛、広い好評を得ており、これは当時の文芸流行が地方に及んでいたことを証例している。

この中に、亀井魯・亀井昱・僧宗暉・亀井昇・亀井萬の出展名が見られるのは、少栞祖父南冥・父昭陽・南冥実弟で崇福寺住職退隱後の曇末、次いで叔父の大荘(号「雲来」と大年(号「天地房」)であり、南冥が第一子皆墨妙と自



西都雅集展観書画題名 (20cm×222cm)

賛し、世人も「五亀」と呼んで讃えてくれた亀井一家揃っての出展である。これに「行書 一行亀井友之」とされるのが、本篇主人公、少柴九才の出展にはかならない。

さて、この西都雅集についての亀井家記録は、わずかに亀井家譜（万曆家内年鑑として市販の木版刷り年記帳）の文化三年（丙寅）欄に、次の二行を昭陽筆の書き込みで見ることが出来る。

「二月秋侯宰府雅集友也与焉遂従侯、如秋月賜羽織于豆縮緬帶于友也」
ただ、この記事を解すると「三月、秋月侯による太宰府雅集に少柴も共に出展した結果、秋月侯より侯の婦館に従うよう命じられ、秋月に於て昭陽は羽織を、少柴には縮緬帯を賜わった」となる。

書画展には、秋月藩主の臨場、出展の総覧、これには古処・昭陽の陪従（註1）と説明もされ、また、出展者の身分格式による拝謁と、無資格者であっても列座して藩主を迎え

る形式は許されたと思う。昭陽は、直礼身分であり君前に出られるが少柴を付き添わせて列参したと思われ、こうした席座では、殿様は無言である。少柴出展作については、昭陽自身が家の面目にかけた吟味によるものであったに違いなく、秋月藩主も少女九才の出品、その出来には当然に強い関心があったであろう。幸いに、少柴作は殿様の観賞にかなひ、藩主婦館に従行を命ぜられたことは、少柴にご褒美下されと、昭陽の親心に、いま一つは西都雅集に対する昭陽慰労もあって、親子共々に気づけりがあったとしなければならぬ。

秋月藩主長舒は、こうした配慮ができる殿様であり、南冥に対する同情と、昭陽に格別の温情は、以後の本稿で再三語ることになる。

因に、秋月藩士で亀井昭陽に学び藩校教官となり、後に名吏として評される吉田平陽が「国計龜鑑」と題し、秋月創藩以来の財用通史記録の中で、西都雅集を次のように述べて

いる。

「大陳書画於太宰府一會者百八十余、費銀十八貫五百二十五匁」と
この訓読は、「大いに書画を太宰府に陳べる。会する者百八十余、費銀十八貫五百二十五匁」と。

この費銀を、銀六十匁を二両換算で見ると金三百八両三歩となり、相当の出費であったことがわかる。

それにしても、少柴の西都雅集による秋月藩侯褒賞の事実は、得難い幸運であり、大いに世人の祝福を得たとされよう。これによって彼女は女流文人として目ざましい成長を遂げる機運になったことも違いない。彼女は確実に自信を持ち、学問上達も速やかに、やがて父昭陽著述の筆写を手伝い、頼み甲斐のある助手となる。ほどなく、彼女が余技にした詩書画渾然（詩と書と画の三つがとけあうことをいう）の作品に世人の注目が集まり、高評を受け、このため彼女は予期もしない、詩債を纏い、画債を担う境地を日記にするに至る。それらは人を介し義理にからんで押し寄せるもので、いささかの金銭負債ではないにしても、大いに少柴を困惑させることになるが、これは後に述べる。

九月二十五日、父昭陽、百道の自

宅を出発、秋月藩主長舒の江戸参勤に従行する。このことは早くから内示されており、亀井家では予期したことであった。目的は、秋月藩主の意向で、父南冥著述「論語語由」を江戸に於て開板（著述を板木に彫り出版すること）、校正のため昭陽同行とされており、その詳細は、昭陽を本稿にしてする。

例によって亀井家譜記事は「豈如東都、従朝陽 侯也、九月二十五日 発百道（昭陽東都に行く、朝陽侯（註3）に従う、九月二十五日百道を発す）」

昭陽は、門下生の中野左逸・三苦復と下僕久八を従えた。

残念ながら、この父昭陽の江戸行きに、少柴の言動を語る記録は全くない。

父に従う三人のうち、三苦復（号「雷首」）は、本稿の始めに少柴が「九州第一の梅、今宵君のために開かん……」と、艶詩を送った相手とされ、十年後に夫君となる人物であるが、その運命を夢にもしていない時であった。

（註1） 貴人につかえて学問を教える人
（註2） 貴人につき従うこと
（註3） 秋月藩主長舒のこと

江山風月千古無二心

少柴 龜井 友之

書画会出展当時の少柴書（124×18）

展示品紹介

文人画

今季は豊後文人を展示紹介する。
豊後文人と呼ぶのは、田能村竹田を祖とし、その直弟子である帆足杏雨と田能村直入の両系譜をひく豊後人で、文人画をよくする人々を総称する用語であると思う。

まず向って左は「帆足杏雨」。この人の作品は本人の人柄そのもので、



帆足杏雨
「淡彩深山賞月図」
(129×42)



田能村竹邨
「静境訪友図」
(129.5×39)



田能村竹邨
「漁樵問答」
(128×36.5)



白須心華
「彩色牡丹図」
(126.7×36.5)

生家の裕福もあって大層でいねいに描かれているのが見所である。

次の「田能村竹田」も同じで、山水図は一見して竹田の作品ではないかにも質問される方があり、これは作者にも名誉な話であると思う。

次も同作者であるが、図柄が変わっており、一般に漁樵問答と呼ばれる、漁師と樵夫の二人がお互いに自分の仕事を自慢し合っている風景図で、文人画の題材として珍しく、しかも良く出来た作品とされる。

次は、「白須心華」の淡彩牡丹図で、季節の作品となるが、上手に描かれている。以上の四

点いずれも保存がよいのがなによりである。

次のコーナーは、同じく豊後文人であるが、少しく違いがある日田の学僧で、絵も良くした「平野五岳」の三幅である。左から青桐・蔬果・牡丹各図の自題作、五岳は字も得意であった。とかく、五岳作品は粗画も多く、これが前三者との違いになる。

本来、文人画は学と詩文の教養に絵画を兼備した作品であり、あまり粗末に走り書きされたものは観賞に適さないとと思われる。

他の展示品

○第1展示室

(四月二十二日入替)

- ・古高取 茶道具銘品
- ・高取床飾(置物) ほか

○第2展示室

(四月二十二日入替)

- ・亀井家資料
- 「西都雅集展観書画題名」 ほか

・豊後文人画(上述)

- ・矢立・硯箱など文房具類
- ・廻船模型(18)

○第3展示室

- ・多々羅義雄の絵画
- 油彩類15点ほか

本号執筆者の紹介

丸山 雍成氏

「史跡・能古島古案跡」

九州大学文学部教授

福岡市文化財保護審議会委員

庄野 寿人氏

「真翁銅像ものがたり(二)」

「閨秀 亀井少舜伝四」

当財庫陽文庫理事長

編集後記

能古焼古窯の文化財指定、初めての学芸員実習と行楽客賑わうゴールデンウィーク。諸般の事情に追われて四号発刊、お待たせしましたことをお詫び致します。繁雑な内情とは裏腹に、生い茂る緑の静かなる能古。文人画展は筑前から豊後へと替わり、お楽しみ頂けると幸いです。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月2日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX(092) 883-2881